

璉城寺通信

第69号

2022年4月5日

璉城寺通信編集委員会

〒630・8307

奈良市西紀寺町45番地

TEL 0742・22・4887



春寒の 海に沈められし 生命なり

77年目の阿波丸慰霊祭

下間景甫

4月1日、いいお天気に恵まれ、77回目の命日にあたる阿波丸犠牲者慰霊祭を勤めさせていただきました。

時節柄ご多分に漏れず、遺族会会長さんのお宅でコロナ感染が起こり欠席されるという連絡が直前に入りました。ほかにも例年参列されている方々も「参列を控えたい」とのことで、少し寂しかったのですが、「登美ヶ丘憲法9条の会」から5人が参加され、無事法要を勤めることができました。

また、コロナ対策として会食をやめて、お弁当を持ち帰っていただくことにした関係で、例年の懇親の場がないために法要の席で挨拶や感想をお話しいただくことにしました。

遺族を代表して沢村さんは、「こうして毎年慰霊祭を勤めることが何よりの功德です。阿波丸の法要を77回も続けているところは他にないと思います」と述べられました。

富田林から参加された占部さんは「なぜ父親が亡くなったのか、母親や元同僚という人の話を聞き、調べているが不思議なことだらけ：」と肉親への思いを述べられました。

憲法9条の会の秋山さんは「私は広島の被爆者です。なんとなくでも憲法9条を守ることの大切なことをもっと多くの人に知ってもらいたい」と話され、それぞれの思いを交歓できたこと、でいっそう意義深い慰霊祭になったと思います。

式典のなかで詠んだ表白が皆さんお胸に響いたらしく、ぜひ、

この通信に載せてほしいとの要望がありましたのでご披露いたします。

慰霊祭・表白

それ惟れば、季節は巡り2月20日、庭の水仙が花を咲かせ、阿波丸慰霊祭の近いことを知りました。

そしてその数日後、遠い国で戦争が始まりました。街が焼かれ、病院や原子力発電所が破壊され、多くの子供が幼い命を奪われています。こんな身震いする事態が毎日報道されています。隣国ウクライナへ侵攻したロシアにどんな言い分があるのでしょうか。何の罪もない子供たちの幸せを奪っているのです。

『戦いの後に残るのは悲しみだけ、いつになったら気づくのでしょうか』こんな歌があります。

本日、阿波丸慰霊の集いに参加した私たちにとって、先の戦争で親・兄弟が命を奪われた縁者でもあります。戦争の悲哀を肌身で感じてきました。愚かな戦争を今すぐやめて、一日も早く終息を願うばかりです。

また、この2年間、新型コロナウイルスの感染拡大の猛威を体験し、その根源に地球の破壊があることも知りました。ロシアが企てていると伝える核兵器の使用は、さらに人類と地球の破壊を早める愚かな行為だということになります。絶対あってはなりません。

本日ここに執り行う阿波丸慰霊祭において改めて平和の誓いを祈念するものであります。

3月19日、お彼岸の日でした。嬉しい訪問客がありました。2015年11月28日ここ璉城寺で結婚式を挙げた清水さん一家が奥さんの実家・姫路へ帰る前にお参りに寄ってくれました。清水さんは奈良大学、奥さんは奈良女子大在学中、「奈良古社寺研鑽会」の会長・副会長の関係で当寺の拝観には大変お世話になった方です。

清水さんは実家のある群馬県で発掘調査に従事され、奥さんは富岡製糸記念館を辞めて子育てに専念されているとのことです。

坊ちゃんとお嬢ちゃんは両親を「とと、かか」と呼んでいます。そんな幸せな様子を見せてもらってうれしい時間を過ごしました。

また、このほど墓地の一角に永代供養墓を新設し、先だって建碑除幕式を執り行いました。その時の表白です。

それ惟れば

お墓事情も著しく変わり、お墓じまいが増える中、境内に永代供養墓が欲しいとの声が上ががり、供養墓を見学し、相談に乗ってくださいった方々のご意見を聞き、本日、ここに永代供養墓の建碑除幕式に至りました。

太陽の恵みをいっぱい受けるこの供養墓に多くの人々が手を合わす日々でありますよう願い願います。

実に

報じても報ずべきは如来の恩徳
謝しても謝すべきは師教の恩到なり

願わくば

ここに廟塔の建立を奇縁として聞法求道の志いよいよ篤く
念仏成仏の大道を歩みます
三宝深く大悲を垂れて哀愍照護し給え



璉城寺境内の永代供養墓

3月末に身寄りのない人を後見する弁護士さんから読経の依頼を受け葬儀を執り行ったのですが、たまたま奈良市の葬祭場が4月1日オープンし、ここで焼かれた遺骨が届けられました。先に亡くなられた夫の遺骨と合わせて建碑した供養墓への第一号ということになりました。

桜も満開。この通信発行のあとには、すぐに「春のお念仏会」が始まります。そして5月の秘仏開扉が迫っています。今年は南都応援団が応援できないという知らせがあり少し困っています。一か月の長丁場です。この際、もしお手伝いいただける方があればと、紙上を借りてお願いする次第です。もちろんコロナ対策を十分にさせていただきます。

一日も早いコロナの収束、ウクライナからロシア軍が撤退することを祈念します。

合掌

マツリカ句会

二月例会より

(作者不詳)

春寒し齒くいしはる鬼瓦

足裏の渡り廊下の余寒かな

鶯や障子開ければ春告げ草

祖母仕込み舌が覚える諸子煮る

山焼けて黒木若草けぶり顔

寄り添いて白梅二輪客を待つ

庭を掃く冴え返る音竹ぼうき

紅梅や青年黙々墓掃除

料峭りょうしょうを蹴とばし駆ける子らの声

(料峭は春風が肌に寒く感じられる、春寒の季語)

京終さろん

年最初の京終さろんは1月13日、松の内での開催。竹中良行さんの「紀寺を理科する・紀寺で理科するー京終駅を出発進行！」



自己紹介によると、竹中さんは小学校・中学校、そして女子高校で50年の教員生活を終えて、終の棲家として紀寺町に移住してきたとのこと。この街には興味深い場所や物がたくさんあって、毎日スケッチに出かけている。そこから得たもので、長年教えてきた経験を活かして「理科」したいということ。です。

教師としての心得は三つあります。一つは「エー、そんなすごいこと知らなかった」と興味をひく情報提供。二つ目には、「これならできる」という意欲を育てる。三つ目に基本的なことは徹底的に覚え込ませる。「鬼の竹中」といわれても生徒には自信を持つてもらうことが大事です。その教員生活の経験の一つに生駒市にある高山植物園の「竹は木なのか。草なのか」というテーマがありました。これは簡単に答えられる問題ではありません。正解はイネ科の植物ですが、『古今集』に「木にあらざ草にあらぬ竹のよな、はしにわが身はなりぬべらなり」とあります。これは教師時代のひとこまで、いま興味をもって調べているのは、京終駅を中心にした機関車の歴史や仕組みです。「汽笛一声新橋を」と歌われた鉄道唱歌も「通信省令」に「機関車を運転する時に鳴らす」と書かれています。また蒸気機関の発明はジェームス・ワットではなかったとか、

動力について外燃機関から内燃機関へ進歩したこと。走行にさいしてカーブを回る工夫。何十両もの貨車を牽引して運行するには「連結器に遊びをもたせる」など、「エー！」と大人も知らなかったことがいっぱいあります。

竹中さんの教え子はいま各界で活躍しています。虫が大好きな子は「写真でわからないと竹で模型を造り、後に竹の芸術家になった子もいます。会場からの質問に答えて、今後の目標は「三笠山の安山岩を調べたい」「かつてテイクレコードがあったが音の缶詰は？」など考えているとか、86歳とは思えない好奇心を燃やしていらつしゃいます。

二月例会はいよいよ一〇〇回目。記念講演は京終に欠かせない、この人ー寮美千子さんです。「京終さろん」の名付け親であり、肩書に「作家・詩人」とあって、テーマの「奈良が私を呼んでいる」の内容が魅力的でしかも豊富。どう表現すべきか迷います。しかも作家だけに気を使います。そこで用意された原稿をお借りしました。



これがまたA4版27枚・二万字もある貴重な代物。すべてを紹介したいところですが無理です。抜粋にとどめます。

寮さんはどうして奈良に移住したのか。きっかけが2005年、50歳直前に「泉鏡花文学賞」を受賞したことでした。受賞記念講演で経歴を語っています。

コピーライターを経て童話作家になり「毎日童話新人賞」を受賞し作家デビュー。「泉鏡花文学賞」の受賞作品は「楽園の鳥・カルカタ幻想曲」。公明新聞13か月の連載小説。単行本になるまでの苦労。

やっと単行本になるうかとした時に「最後が残酷すぎる」と悟り、ヒマラヤから流れるガンジス川の河口を見るために一か月の旅。自らの体験と小説に登場する主人公の言葉が共鳴します。「君が語る物語のなかを人は旅させられる。きみが美しい夢を見ようとしなければ、人もそのようにしか生きられない」と。「楽園の鳥」は紀行小説であり、恋愛小説、冒険小説、グルメ小説、幻想小説、詩でもありますが、そのどれでもありません。すべてが「楽園の鳥」です。と奈さんは語り、「奈良が私を呼んでいる」という転機になったのです。

奈良に惹かれたのは、高校の修学旅行でした。奈良女子大の数学教師岡潔は「奈良の築地塀のこわれたところなど、世の移り変わりに超然をしているのがいい」とひなびた風情を紹介しています。私は、まさにその感覚を持った女子高生でした。息が止まるほど「すてき」と思うような子だったのです。移住したのは「泉鏡花賞」受賞の翌年でした。

ならまちの南の端のマンションは、まるで世界遺産の真ただ中に住んでいるようなもの。徒歩で元興寺・興福寺・東大寺へ行ける。街のなかになんと原始林がある。私たち夫婦は仕事そっちのけで、毎日、暗くなるまで自転車を乗り回した。ところがある日、奈良刑務所を知って出かけた。赤い煉瓦塀が西洋のお城のようです。門衛から「9月の矯正展には一般開放される」と教えられて見学。受刑者の少年たちの作品に風景画や詩・短歌がありました。その繊細さに驚き、自己紹介して「詩は書くだけでなく、声を出して読むのがいいです」をいったことが、10ヶ月後に講師依頼が舞い込んだのでした。「収監されているのはどんな罪の人？」と尋ねると「強盗・殺人・レイプ・放火・覚醒剤」と聞いて腰が引けたが、熱心な説得に応じて月一回、「絵本と詩の教室」を約10年務

めることになりました。その様子は「空が青いから白をえらんだのですー奈良少年刑務所物語」になりました。合計186名が受講し、驚くべきことに、絵本も詩もすぐに効果があった。心を開くと、あふれ出てくるのはやさしさでした。人を殺す罪人に、こんな優しい心があった……。そのふれあいを描いた本につづいて、第2詩集「世界はもつと美しくなる」には99編の詩が納められています。

しかも、これを契機に夫と共同で建物の美しさを写真集にし、廃庁と同時に取り壊しの動きを知って、保存運動に取り組みました。外見が美しいだけではありません。明治時代、西欧社会と肩を並べようと司法省の若き技師・山下啓次郎（ジャズピアニストの洋輔氏の祖父）が世界の監獄を見学して造ったものです。建物は昭和初期には治安維持法による政治犯・思想犯、部落解放運動「水平社」の西光万吉も収容されていました。戦後は一転して少年たちの更生のために全寮制の職業訓練所になったのでした。奈さんたちの保存運動の結果、重要文化財に指定され保存が決まりました。建物は民間委託して史料館とホテルが予定されましたが、コロナの影響で進展していません。

奈さんの話はまだ続きます。作家活動のほかにも、平城京の地下水位を守ろうとした運動など、いまでも続けています。

奈良に来て16年、意外に多く仕事したことに驚いています。よそ者の私たちを温かく受け入れてくれた奈良に感謝しています。まさしく大仏さまの大きな掌、そこで出会い生きていけることは大きな喜びです。と結ばれました。

.....

3月のさろんは、西山厚さんの「**聖林寺の十二面観音像**」がテーマでした。ちょうどこの時期、奈良国立博物館で特別展示中の仏像です。



聖林寺の十一面観音像は従来、明治維新の神仏分離令によって「野ざらしになっていたのを聖林寺住職が拾ってきた」という伝聞があり、これを基に和辻哲郎の『古寺巡礼』や白洲正子の『十一面観音』などで紹介されてきました。また最近では、NHKテレビの「歴史秘話」では根拠もなくこの説を基に放映したが、西山さんは、これは大きな間違いだと力説されました。

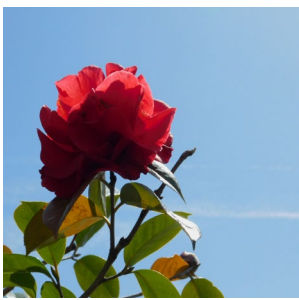
十一面観音像はどこにあったのか。三輪山を神体とする大神神社には仏を祀る寺があったのです。いま若宮といわれている建物は神社っぽくありません。そのはずで元は大三輪寺でした。慶応4年（明治元年）の「神仏分離令」―正確には「神仏判然令」であって「令」は神社を対象に出されたもので「神社に僧侶がいてはならない。ご神体を八幡菩薩など仏教用語で呼んではならない」というものであった。

この時の大三輪寺別当は 大昶だいちょう という人で聖林寺住職の弟子であり、明治政府の「令」をうけた直後（慶応4年5月）に大三輪寺と聖林寺が取り交わした覚書があります。「御一新により当分（仏像を）お預かりする」とはつきり書いています。署名もあります。十一面観音像は「野ざらし」ではなく、きちんと手続きをとって聖林寺へ移っていたことが証明できるのです。

大三輪寺別当 大昶だいちょう はその後改名し「神先大膳」を名乗り、仏殿を神社にするために、経典、金具、地藏尊などを売却。いまの金額に換算して約2億3千万円を得て仏殿を改修し、ここに神像を祀りました。

1997年発掘調査によって大三輪寺の第一期の建物跡が検出されています。その報告書をみるも、双堂と本堂の規模ではあの大きな十一面観音像は収容できそうにありません。十一面観音像は鎌倉時代に叡尊法師が聖林寺の蔵を改装して安置されたと考えられる。と、西山さんは解説されました。

その後の聖林寺は、明治19年フェノロサ・岡倉天心・狩野芳崖らによって古社寺調査が行われ、報告書は岡倉天心が書き、木心乾漆造りの十一面観音像の像高が2・09メートルとして広く世上に公開されたことになったのです。この時以来、先の述べた「野ざらし」説が横行したのがなんとも残念です。いまその収蔵庫の修理に際して奈良国立博物館で展示中になっています。



京終天神の歴史よもやま話(二)

京終天神の二つの源流―富士権現と五条天神

大塚恒平

前回、京終天神と関係があるかもしれないが、あまり知られていない室町期の「五条天神」について紹介しました。今回はもう少しよく知られている、江戸時代初期の記録について紹介します。

京終天神の菅原道真の勧請伝説として、一番有名な地誌の『奈良坊目拙解』に載っている、能登川上流の高畑村との水争いで北野天神に勝ちを祈願して勝訴したので勧請したという話はご存じかもしれません。

ですが、実はこの記録、『坊目拙解』にしか載っていないのです。他の地誌、『奈良曝』『奈良名所八重桜』『大和名所図会』『中野友山文庫奈良地誌』などでは、よく似ているのですが、異なる記録になっており、その内容はこうです。

昔から京終には伊勢・春日を祀った鎮守があり、慶長100年に鹿野園村との水争いの訴訟で駿河の国に行った際、富士権現に勝ちを祈願して勝訴したので伊勢・春日の鎮守社に富士権現を迎え入れて、それ以降、富士権現が鎮守となったというものです。つまり水争い勝訴で勧請した神は天神ではなく富士権現だということです。水争いの訴訟自体は同時代の日記である「本光国師日記」の慶長19年(1614年)6月12日の記録に残っており、事実であることが確認されていますが、はたしてこの時に勧請されたのは、天神と富士権現、どちらが正しいのでしょうか。

いくつかの点で、私は富士権現の方が正しいのではと考えています。その理由はこうです。

① 富士権現説を採る地誌では、勧請前は伊勢春日を祀っていたことを

明記していますが、『坊目拙解』では伊勢・春日に言及していません。京終に伊勢・春日が祀られていた時期があることは、天理図書館保井文庫の奈良町絵図に京終に春日社の記述があることでも明らかですが、その記載がないのは『坊目拙解』に疑問符が一つ灯ります。

② 水論の訴訟があったのは駿府です。駿河の富士浅間に祈願するのはとても自然ですが、京都の北野天神に詣でるのは少し不自然です。

③ 富士権現説「地誌」のいくつかは、当時の観光案内のような書物で、市場に出回ったものです。来歴の真偽などはともかく、京終での富士権現の存在は事実であったと思われます。それに対し『坊目拙解』は、その科学的アプローチは評価されていますが、近代まで存在があまり知られておらず、同時代の多くの目での検証はされていないと思われます。

④ 京終村は宝永3年(1706年)大火に襲われ、京終天神の縁起も燃え尽きて失われ、詳細が分からなくなってしまうましたが、この大火について採り上げている「地誌」は『坊目拙解』のみです。実際、『坊目拙解』自身、記事の中で火事のため来歴もわからなくなると述べておりながら「地誌」の記述に重きをおくのはおかしいです。

以上の点からみて鹿野園村との水論で勧請された神は富士権現であり、京終には一時期富士権現社があったと考えるべきでしょう。

では、今の京終天神の菅原道真は、どこから来たのでしょうか。私は、前回紹介した五条天神がその起源で、元から京終には菅原道真が祀られていたのではないかと思います。つまり、ある時期は京終に天神社と富士権現社の二社が並び立っていた時代があったのではないのでしょうか。それを裏付けるように、実は「中野友山文庫奈良地誌」では、京終町の条に、「天神社」と「富士権現社」の二社があったという記録が残っています。では逆に、京終にある時期は二社あったとして、それがなぜ一社、天神社のみになってしまったのか、富士権現はどこへ行ってしまったのでしょうか。おそらく、理由は不明ですが(もしかすると大火も関係して

いるのかもしれませんが）、ある時期から天神社と富士権現社は合祀されて一つの神社となったものと思われます。というのも、坊目拙解に記載された江戸中期から、昭和初期に至るまで、京終天神の祭神は三神相殿での記録になりますが、その三神のうち二神は必ず、菅原道真（天神）と木花開耶姫（富士権現）となっております。これは、それ以前の地誌に残された状況から見ても、天神社と富士権現社が合祀されたためにこの二神が相殿となったと考えるのが自然でしょう。

ちなみに残る一神も、江戸期は大山祇神（木花開耶姫の父、つまり富士権現起源）、明治期は天穂日命（菅原道真の祖先神、つまり天神起源）となっております。坊目拙解が

水論での勧請を富士権現ではなく天神だと取り違えたのも、村井古道の時代には両者が合祀されていたためではないかと思われます。

今回は、よく知られている水論で神を勧請したという京終天神の縁起が、天神ではなく富士権現の勧請だったのではないか、その後富士権現と前回紹介した五条天神が合祀された神社が、現在の京終天神の起源ではないか、という点を論じました。今回は、江戸時代初期の京終天神が当時の文化の流行の中心になった話題をとり上げたいと思いま

す。

璉城寺の謎とロマン

藤にからまれた木は枯れぬる（その2）

野尻幸男

前号で璉城寺に保管されている「紀有常系図」は江戸時代に手向山八幡社の神主・紀延親が書き残したものであることを紹介しました。そしてこの「系図」が手向山神社と璉城寺の間で親交があったことに注目しました。この関係は稀有なことでしたが、有常に係るもう一つの事実が分かってきました。

水郡神社（錦織神社）の神主

紀有常には在原業平や藤原敏行の妻になった二人の娘以外に子孫はいないと思っていました。ところが「有常の末裔」と称する一族が神主となっていた神社がほかにもありました。

『古代氏族系譜集成』『紀氏系図』をみると、有常に注釈があつて「水郡家諸記録」（水郡庸皓著）に有常の子孫・有信が従五位下に叙せられ甲斐荘（富田林市内）の荘司となり、南北朝時代に紀兵庫允・元雄が水郡神社神主になったと伝えていきます。



「水郡神社」は明治40年、錦織神社と名称を改めますが、紀元雄が水郡神社神主になったのが南北朝時代とのことです。

水郡神社は大和川の支流、石川のほとり（富田

林市甲田)にありません。

石川といえば、文武天皇元年(673)「藤原朝臣宮子娘を夫人とし、紀朝臣竈門娘・石川朝臣刀子娘を妃とす」という『続日本紀』の記述が浮かびます。

記事

藤原不比等は娘の宮子を文武天皇に嫁がせ、生まれた首人親王(のちの聖武天皇)には宮子の妹安宿媛(光明子)を嫁がせ、藤原氏繁栄の基を築きました。一方、紀竈門娘と石川刀子娘の「妃」は文武天皇没後5年にして抹消されます。「水郡家諸記録」をヒントにすると、この二人は石川流域を本籍地にする氏族の娘かと思われれます。「藤にまかれた木は枯れぬる」現象の事跡をみる思いです。

水郡神社を訪ねました。本殿は総漆塗りで3つの棟を寄せ集めた独特の造りで、昭和8年国宝(今は重要建造物)に指定されたとのこと。南北朝時代の建築で日光東照宮のモデルになったとも関係文書に書かれています。

また、近鉄・河内長野線をはさんで東側に水郡邸があり、大阪府史跡指定になっています。標示板に「水郡家(本姓・紀)は紀有常を遠い祖先とし、伊勢国神戸藩の代官・大庄屋を務めていた」と表記しています。大阪府の史跡指定を受けたのは、幕末に尊王攘夷が盛んになった時、孝明天皇が親政を布告し、これを受けた天誅組の中山忠光総裁らが堺港を経由して河内に入りました。そして一行が水郡家で軍議を開いたという歴史的事跡を顕彰する意味があったと思われる。これら水郡神社と水郡邸は紛れもなく紀有常の後裔たちが残したものです。

それにしてもどうして総漆塗りの立派な水郡神社なのか。郷社にしては立派すぎます。実は、その周辺を探ると驚くべき事実が判明しまし

た。「水郡家諸記録」という紀氏の末裔という水郡庸皓氏が昭和57年に筆



上—錦織神社、下—水郡邸

書きで刊行した書物があります。そこに次のように書かれています。

「足利二代将軍・義詮の夫人は男山八幡の神官の娘・紀良子で足利尊氏が九州より東上の時、男山八幡宮へ戦勝祈願文を送っている。水郡神社は、足利将軍の命によって正平18年(1363)再建された時、河内観心寺の住職瀧覚坊聖瑜(楠木正成の師)が導師を務めており、観心寺の本堂も同時に着工し、前の一倍半大きいものが建てられた」と。

すごいことが判ってきました。義詮と紀良子との間に生まれた3代将軍・義満は、金閣寺や相国寺八角七重塔を造営して人物です。その義満が水郡神社の建立にも関係していないか。と一瞬思ったが、残念ながら水郡神社創建時、義満はまだ6歳。これでは無理…。水郡神社に関与し

たのは義満の父のよしあきら義詮か、あるいは母の紀良子の生家・石清水八幡社の援助があったのだろうか。しかし『富田林市誌』も「富田林市史」もこれを採用していません。水郡にぎりつねあき庸皓氏の説とちがっていますが、いずれにしても三間社入母屋造りの建築は「式内社」でなかったのが不思議です。

水郡家に伝わる紀有常の23代目の末裔（元雄）が、貴族社会から武家社会へ移行する激動の時代にあつて、地方の庄屋クラスとして血脈をつなぎ、神主になった事実がここにありました。手向山八幡社や八坂神社だけではなかったのです。「枯れかかった紀氏一族」はこれらの神社の神主として命脈を伝えていました。しかも水郡にぎり神社が時の官幣大社・石清水八幡宮とも姻戚関係でつながっていました。

石清水八幡宮の勧請と紀氏

石清水八幡宮は清和天皇の勅命を受けた行教が、筑前国（大分県）から宇佐八幡を勧請したわけですが、その詔勅発行の8年前（嘉祥3年・850）、紀氏と藤原家が文徳天皇の後継者（皇太子）の選定をめぐって争っています。

文徳天皇は紀静子から生まれた第一子惟喬親王（9歳）を皇太子にする予定でしたが、時の最高権力・藤原良房は孫娘明子に待望の男子が生まれたことによって、わずか9か月のその男子（惟仁親王）を皇太子にしようとして文徳天皇を説得したのでした。この強引な良房の行状の異常さが相撲での決着シーンに描かれ、後世に伝わっています。

藤原氏は名うての力士が選抜されて登場し、片や静子の父・紀名虎と立ち向う一戦がはじまります。それぞれの応援団に僧正クラスが呪法を称えて見守るなか、戦況不利と見た藤原支援の惠亮僧正が自らの頭を三鈷で叩き割り、自らの手で脳天をつかんで相手に投げつけたという。呪

法者の験の争いまでが後世に伝わっています。

説話化されたこの事件から8年後、良房は清和天皇即位とその後の安



寧を願って、行教に宇佐八幡神の勧請を申し付けたのでした。

当時、行教は大安寺僧として、空海らとともに密教の習得に励んでいました。仏教徒として俗世間の出来事に関心がなかったかのように思われますが、勅使の役を引き受けたのは惟仁を皇太子にするときの祈祷師だった空海の弟子・真雅の推挙だったとされています。真雅の推薦を受けた行教は紀氏一族であり、さきの皇位継承に関する一連の事件を知りながら、なぜ宇佐神宮勧請に応じたのか。しかも紀氏一族と対立した側からの推挙だったわけだけに行教の心境は複雑だったと思われる。皇位継承事件や当時の政局について知らなかったはずはありません。

『八幡神社』（勉誠社・2003年刊）の「行教」（中前正志記）の項に行教の行動と心境について次のように述べています。

「紀氏にあるまじきことのようにだが実は、紀氏一族の凋落を救うため、

と確認できます。

編集後記

皆さん！ いかがお過ごしでしょうか。本来なら、心がうきうきとなる季節ですが、鬱陶しい事件の多い春ではないでしょうか。2年間も続いているウイルス感染ですが、オミクロンに代わる新種が生まれ第7波の兆候もあるとか。対策は引き続き求められます。

それになんといっても、ロシアのウクライナ侵攻。こんなところで、いまごろ戦争は起こるとは考えもありませんでした。ウクライナがNATOに接近するのを阻止するための武力攻撃。国連憲章違反は当然です。しかも病院や学校を無差別に攻撃する人道上の問題も見逃せない。なのに、ロシア国内の世論調査ではプーチン政権支持が、なんと80%だという。国内抜けプロバガンダの影響だとか。かつての日本の「鬼畜米英、欲しがりません、勝つまでは」を思い出します。

報道管制は支配者側の最も重視すること。日本でも防衛省の勉強会で「反戦デモ」や「報道」を警戒対象にしていたとか。加えて、この事態に便乗して「自衛隊明記の憲法改悪」の議論とキャンペーンが元首相を筆頭に繰り返されています。他国の不幸な事態にカンパをあつめ、救済活動をしている人々や団体と比べてなんと悲しいことでしょうか。

77年前に起こった阿波丸撃沈事件の犠牲者を追悼する行事がありました。コロナで参加できなかったご遺族に代わって「9条を守る会」の会員さんが参加され、それぞれ追悼の言葉を述べられました。趣旨を集約した小紙のつぶやきに賛同していただけるなら幸甚です。

もうすぐ璉城寺の特別拝観がはじまります。京終さる人も俳句会も寺の行事も、ご近所や一般の方々の交流も、コロナが一日も早く収束して

あえてとった行動とみられている」というのです。そして宇佐八幡勧請には行教の弟益信が師とする真雅の推薦だったという人間関係にも触れています。行教は一族の窮地を挽回するチャンスとばかりに気追い込んでいたのでしょうか。凋落しつつある紀氏一族の挽回を期して、あえて藤原氏の側についた行教と弟の益信の活躍が実って、その子孫が男山八幡社の神主になったのは何よりも喜びだったことでしょう。行教の墓といわれる高さ6m余りもある大きな五輪塔が男山の一角、感応寺の山門脇にあります。

後年、紀貫之が土佐守の任務を終えて帰京する途中、船が淀川の左岸、山崎にさしかかった時の状況を『土佐日記』に書いています。「東の方に山の横たわるのを見て、人に問えば、八幡の宮という。これを聞きて悦びて、人々拝み奉る」と。一行の悦びは航海が無事だったことに加えて、同じ紀氏一族の行教が成し遂げた偉業に対する称賛の念を表したのもともいえるでしょう。

「人々拝み奉った人々」のなかに貫之の妻もいました。京都で生まれた幼児が在任中の土佐で亡くなった悲しみが綴られています。その妻とはなんと藤原慈望しげもちの娘で、結婚した時は17歳。祖父は忠文、平将門の乱鎮庄の責任者に任命された人物。家系をたどると不比等の4兄弟の三男宇合うまかいです。ここにも「藤にからまる木」の関係図がありました。



その貫之の墓が璉城寺境内で数年前に見つかっています。相当に古く、おそらく貫之没後すぐに建碑されたのか、千年の風雪によって表面の文字が摩耗し、肉眼では判読できませんが、拓本で「貫之の墓」

以前の状況に復帰できることを願っています。(野尻幸男)